慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森田勉 初期社会主義思想の形成
Sub Title	Tsutomu Morita: Die Formation des Gedankens des frühen Sozialismus
Author	蔦木, 能雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1974
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.4 (1974. 4) ,p.216(64)- 219(67)
JaLC DOI	10.14991/001.19740401-0064
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19740401-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書　評

森田　勉

『初期社会主義思想の形成』

(一)

本書はゲオルク・ビュヒナー (Georg Büchner 1813-1837) とヴィルヘルム・ヴァイトリンク (Wilhelm Weitling 1808-1871) の社会思想を通じて，ドイツ初期社会主義一般がかかえていた課題に一つの解答を見出そうと試みる。ドイツ初期社会主義一般の課題とは一橋大学の良知教授の言葉を借りるなら「実践的にドイツ労働運動史の端緒を形づくりながら，その歴史的な対象認識に本質的欠陥があったために，実践の課題意識が悲劇的に歴史的現実からはなれた」[(1)]ことであり，このことに打開策を見出すことはドイツ初期社会主義思想史研究の使命でもある。本書の意図は，いわばマルクシズム前史という思想史上の迷路に一筋の道を通そうとしたことと言えよう。

(二)

本書は第一部がゲオルク・ビュヒナーの社会思想，第二部がヴィルヘルム・ヴァイトリンクの社会思想という構成である。しかし，内容は第一部の方に圧倒的に多くのページ数がさかれており，ヴァイトリンクの社会思想は半ば第一部の付録の様な感じである。著者によれば「放浪仕立職人の革命的社会主義者ヴァイトリンクを通して，空想から科学への社会主義の発展の一過程を分析し，ドイツにおけるプロレタリア階級意識の生成と社会革命の世界観の形成，そして初期社会主義自体が提示している諸問題を追究しているうちに，ヴァイトリンクの思想と運動の，ドイツにおける前史をなし，社会革命の思想と運動のドイツ国内における萌芽を示しているゲオルク・ビュヒナーに興味をひかれた」(p. 1) 結果であるという。特に著者は，ビュヒナー思想の独自性が『ヘッセンの急使』*Der Hessische Landbote* 等に明確に示される物質的窮乏に基因する人民革命の思想にあるとして，この問題を深く掘り下げて考察することを主題としている。つまり，「ビュヒナーの世界観，とりわけ人民革命の思想は，三月革命前期に市民的人間解放思想が展開していく中から，プロレタリア的解放思想が出現する過程において前者から後者への転回点をなしており，この時期における各種の社会思想の諸流派の中にあって，特異な立場，独特な思考方法によって，この過渡期の世界観的諸問題を鋭く鮮明に提示しており，またそれらのあるものは今日の思想的情況，諸問題とも深いかかわりを持っている」(p. 1) からであると。

ゲオルク・ビュヒナーの名は『ダントンの死』Dantons Tod をはじめ主として文学の方面で広く知られてはいる。しかし，革命家，社会運動のすぐれた理論家としての彼は余り知られていないのが現状である。本書は「社会思想史的な視角からの研究は，まだほとんど行われていない」(p. 26) ビュヒナー像を，「従来の研究成果に立脚しつつ，研究者の主観的恣意的な付加物歪曲を排除して」(p. 32) 著者なりに再構成していこうとするものである。

(三)

これまでのビュヒナー研究は作家として文学の立場から，革命家として政治の方面から，あるいはまた『ニゴイの神経系に関する覚書』*Mémoire sur le système nerveux du barbeau* の研究者として自然学の関係から彼を別個に切り離して取り上げていた。著者は「革命家，作家，自然学者そして哲学者としてのビュヒナーを切りはなさないで，かれの思想の総体を，まとまりのある統一性をもったものとして，その共通の根底をなしている思考構造，一貫した世界観の論理構造に則して，かれの社会思想を論理的に再構成し，またその構成諸分野の思想，理論を分析・解明することによって，かれの社会思想の解釈における重要な問題点，諸説の対立点を整理しつつ，かれの世界像の基本的な構造と性格の解明に寄与しようと試みるものである」(p. 35) とビュヒナー研究の主眼点を明らかにする。著者のビュヒナー像構築のための上述の姿勢はまことに頼もしい限りである。評者の貧弱にして凡庸なる頭脳では氏の構想をどこまで理解し誤解しないで済ませるか戦々として兢々である。

著者がビュヒナーの思想的独自性を社会思想史の上に強固ならしめる意図があるのは十分認識できる。とりわけその意図が「一貫した世界観の論理構造に則して，かれ(ビュヒナー——評者)の社会思想を論理的に再構成し……思想理論を分析解明すること」にある以上，一貫した世界観の論理構造とは何であり，それに則したビュヒナーの社会思想史的意義が何であるかを識ることは重要である。

注(1)　良知　力『ドイツ社会思想史研究』未来社，東京，1966，p. 7.

(四)

著者によればビュヒナーの世界観的論理構造とは，「三月革命前期に市民的人間解放思想が展開していく中から，プロレタリア的解放思想が出現する過程において前者から後者への転回点をなす」時代にあって，「……冷静な観察，鋭い分析，熱烈な党派的態度を結合した独特な思考方法」によって「当代の危機の原因，問題解決の方向，したがってまた未来を決定・構成する諸力を，過去ではなくて，現在の世界の中に新しく芽ばえかけ，発生しはじめているものに求め」(p. 40) ることであるらしい。そして，この世界観的論理構造の中ではビュヒナー，その人は「非思弁的行動家的性格」(p. 41) と，更にこの性格と「緊密に結合するその徹底してリアリスティックな性格」(p. 42) を持たなければならないとされる。こうした前提を立てないと著者がビュヒナーについて語る時，力説・強調してやまない現実的唯物論者へ，更には発展させて史的唯物論の思想的先駆者へ彼を結びつけることができないからである。

ビュヒナーは決して観念論者ではないこと，「……一貫してありのままの現実を直視し，現実の世界の中にのみ真理を認識し現実の中に現実を否定する力を探求する」(p. 42) 徹底した唯物論者であることは評者も疑いを入れる余地は全くない。問題なのはビュヒナーやヴァイトリンクの活動するまさにその時期が「既存の社会体制に敵対する革命的勢力が，市民階級からプロレタリアートへと転化してゆく移行期」(p. 1) にあって彼等両名の思想と実践運動がドイツ初期社会主義一般が一様にかかえていた限界をいかに打ち破り，現実の中から生まれた理論が現実に反映していく武器になるかということである。このことは，著者の今後の研究方向と深いかかわりを持ってこざるを得ない。何故なら著者は「わたくしにとって，本書は，ビュヒナー以後展開される亡命者同盟や義人同盟—ヴァイトリンク，あるいは青年ヘーゲル派と初期マルクスおよびエンゲルスの社会思想の研究の出発点をなすものである」(p. 4) とはっきりと述べておられるからである。評者はゴーロ・マン (Golo Mann) のビュヒナーについての見解を実に当を得て妙と考える。「……ビュヒナーは実に心豊かで，感じ易く，皮肉で，物知りで，ペシミスティック，神経症的，さらに生を楽しみ，自然を，山を，森を楽しみ，形而上的なものに傾く，そうした性格があまりに強いために，職業革命家でありつづけるには適していなかったのです」[(2)]と述べ，更に「ドイツにいて，彼が思い浮べることができたのは，多数の貧民が少数の富豪に対して行う闘い，本来の農民戦争，いくらかの学生，手工業の徒弟，叛逆的市民の子弟といった彼自身のようなものにひきいられた闘いだけだったのです。その闘いは，貴族に向い，貴族と結びつくか奉仕している専ら官僚的，アカデミックな市民体制に向います。ですから30年初期の狭隘で田舎じみた状況に対応したのです」[(3)]と。結論を述べよう。ビュヒナーが現実をありのままに直視し，愈々徹底した現実的唯物論の態度をとるにつれて彼の自然科学者としての鋭い観察が恰も顕微鏡を通して社会に向けられるかの様になる。ティエールやミニエーの『フランス革命史』から，歴史法則の峻厳さを学びとったとすれば，同様の態度で吸収，摂取したと思われる。「ひとり，ひとりの人間は波間に浮ぶあぶくにすぎず，大立物もほんの偶然の産物だし，天才が統治するといったって操り人形で，鉄の法則に対して滑稽千万な悪あがきをしているだけ，これを認識するのが人間にはせいいっぱいで，これを支配することは不可能なんだ」[(4)]と。

著者の本書での強調点に，ビュヒナーを徹底した唯物論者に仕立てること，そして彼の歴史観に「独自」の解釈を施していることがあげられる。ビュヒナーは唯物論者であり，歴史における鉄の法則を認識するが故に，「……歴史の発展行程の必然性と予定性，宿命性，歴史的発展の合法則性とその認識，したがってまた歴史の発展における人間の主体的能動的な行為と責任，そして歴史の基本的内容と原動力という一連の問題を追究」(p. 83) せねばならないのである。著者によれば「これらの問題はいずれも決定論的歴史観と宿命史観，

注(2)　手塚富雄，千田是也，岩淵達治監修『ゲオルク・ビューヒナー全集全一巻』河出書房新社，東京，1970，p. 559.
(3)　前掲書，p. 561.
(4)　前掲書，p. 316.

必然史観と偶然史観，観念論的主観主義的歴史観と唯物論的歴史観また階級闘争史観をわかつ決定的な根本である」(p. 83) のだ。ここに到ってビュヒナーはものの見事に史的唯物論形成への思想的先駆者としての名誉(？)ある地位を与えられる素地が提供される。

（五）

著者はビュヒナーの歴史観を宿命史観から決定論的歴史観に「大転換」させることによって，「独自」のビュヒナー像を構築しようと努力する。宿命史観はマイヤー(Hans Mayer)を以てその代表とする。マイヤー説とは，一口に言えば，「ビュヒナーは圧倒的な歴史の宿命論にとらわれているにもかかわらず，しかも歴史の諸力と歴史の法則性との実在に揺るぎない信念をもちつづけている。決定論的歴史観もまた周知のように，歴史の合法則性という概念をあつかう」としながら，「歴史は一切を破壊する暴力の支配という永遠に不変な宿命を負って，予定されたコースを無意味に動いている偶然のメカニズムであり，そこにおける人間のあらゆる能動的目的意識的な行為は完全な無，無意味であるが故に，彼（ビュヒナー――引用者）の史観は根本的に宿命論である」(p. 90) とするものである。

著者にあっては，その「世界観の論理構造」上，すべて首尾一貫して歴史的決定論でなくてはいけない。つまり，宿命論的歴史観を採ると，ビュヒナーが「最高度の能動的積極的決断によって，かれ自身があれほど恐怖した犠牲（逮捕→拷問→発狂や死）をともなう革命闘争に，なぜ熱烈に従事したのか，宿命論と主体的な革命闘争との関係は唯物論者ビュヒナーの頭の中では，いかなる論理構成によって解決されたのか」(p. 91) という問に答えられないというのである。全くもって奇異である。著者のこのような問いかけに対し，評者はマイヤー――著者がその見解の殆んどを依拠しつつも批判しているその人――の一文を以て答えようと思う。「ビュヒナーにとってリアリズムとヒューマニズムは相補うものであった。すなわち，それは現実の再生と，反映されたものへの愛，人間外の領域におけると同じく人間の内にある自然への愛でもあった」[4] からだ。

ビュヒナーは現実を執拗なまでに透徹して見れば見る程，眼前に広がる社会的不正義と困窮する多くの貧民の存在に憤りを燃やすのであり，その諸矛盾の根源が一体何であり，何によってもたらされるかを追究せねばならなかったのである。著者がビュヒナー像を再構成しようとするあまり，多くの言葉を用いれば用いるだけ，『ヘッセンの急使』で力強く眼前の敵共を打ち砕かんと訴えるビュヒナーの雄々しくも生々しい姿が空ろに映る。

（六）

評者は三月前期におけるビュヒナーの思想的独自性，特に著者の強調される人民革命の思想的意義も十分過ぎるくらい認める。しかし，著者が「ビュヒナー以後展開される亡命者同盟や義人同盟――ヴァイトリンク，あるいは青年ヘーゲル派と初期マルクス，エンゲルスの社会思想の研究の出発点となる」ものとして本書を位置づける場合，どの様な意味を持っているのだろうか。

評者の偽らざる読後感を述べるなら，第一部を読了して第二部のヴァイトリンクの社会思想へ移ろうとした時，第一部と第二部との間にまたがる淵が巨大な口をあけているのに気が付いたのである。著者はビュヒナーとヴァイトリンクとの間に広がる巨大な深淵にどの様な橋を架けようとするのか。著者の意図からすれば，両名の思想的紐帯をネオ・バブーフ主義に求め，この新生バブーフ主義を理論的武器として「富者」と「貧者」の，ひいては有産階級に対する無産階級の妥協の無い，断固たる闘争を行っていく基礎が固まったとすること，そして義人同盟から共産主義者同盟へと発展，展開するドイツ社会主義運動，労働運動の流れの思想的核心にすることにあるのだろう。

ヴァイトリンクが「マルクスの挫折せる先行者」であっても，彼の思想と行動の中には「労働者の解放は労働者階級自身の仕事でなければならない」ことが確固不動のものとして築かれているのである。

著者は，第四章第五節，民族の意識と国際思想，と題する一項で，「……ドイツの進歩的知識人の民主主義的人類的立場に裏づけられた民族意識から出発し，ついでフランスで自由主義的一革命的ナショナリズムの洗礼を受け，さらにこれをブォナロッティの思想を吸収することによって止揚し，被搾取階級の立場からドイツ民族の統一と解放を志向したビュヒナーは，その思想の理論的内容の薄弱さはともかくとして，少なくともオリエンテーションのうえではブォナロッティ

注(5) 前掲書，p. 499.

とヴァイトリンクとの中間といえよう」(p. 195) と述べる。本当にそうであろうか。ヴァイトリンクもビュヒナーも仮にブォナロッティを媒介としてバブーフ主義を体得しても，「……おくれたドイツ極貧の，政治的にはまだまったく目ざめていない農民の中に，全面的に希望を託すことのできる未来社会の建設者は見い出せない。そこで……終始被搾取，被抑圧人民大衆の味方をしながらも，最後までこれに同化できず，知識人として民衆の間に間隔をもちつづけている」(p. 33) ビュヒナーと人類の未来へ底抜けまでに明るい希望と信頼を寄せるヴァイトリンクとの間には依然として深淵が存在する。

（七）

ともあれ，本書の意義は，①ドイツ初期社会主義思想史の中にバブーフ主義，とくにネオ・バブーフ主義の占める重要さを示したこと，②ゲオルク・ビュヒナーを初めて社会思想史的観点から取り上げたことの二点にある。

余談めくが，ヴァイトリンクのバブーフに対する崇拝熱は大変なものであった。バブーフに敬服するあまり，後年には彼の息子の一人に，かれの偉大な陰謀家に因んで，その名を付したということである。[6]

限られた紙数の範囲内で著者の本意を真に理解できたかどうかは疑がわしい。恐らく誤解，誤認もさだめし多いことであろう。それについては著者の寛恕を願うばかりである。

（新評論，1973年5月刊，A5，306頁，1800円）

蔦　木　能　雄（経済学部助手）

注(6) Wittke, Carl., The Utpoian Communist. A Biography of Wilhelm Weitling Nineteen-Century Reformer. Louisiana State Univ. Press. 1950. p. 16.